

ねらい

小学校の教職員のほとんどが保育参観をしたことがなかった。そこで、保育参観で就学前施設との交流を進め、保育で大切にしている「子どもの主体性を大事にした指導の在り方」について実際の保育を通して理解したいと考えた。

ポイント

小学校の教職員は、ただ保育参観をするだけではなく、あらかじめ参観の視点に沿って保育者の教育の意図を理解しながら参観できるようにし、後にそれらを意味づけてもらえるよう指導助言の講師を招いて理解を深め、指導に生かせるようにした。交流については小グループでお互いが気軽に話し合えるようにした。

実践内容

＜参観の視点＞

保育参観に行くにあたって下記の2つの視点を設定し、小学校と保育園の教職員が事後研修会で話し合えるようにした。

- ・子どもが何に没頭し、他者とどのように関わり、どんな力を育んでいるか。
- ・子どもが主体的に活動できるように担当の保育者がどのように関わり、どのような環境設定がなされているか。

＜保育を見る＞

保育参観には2交代で小学校教職員全員が参加し、子どもの一日の遊びや生活の流れを考慮し、10～11時頃の5歳児の様子を、上記の視点に沿って参観した。参観中には、子どもたちの日頃の様子や大事にしていることについて園長より話してもらうことで、子ども同士や保育者の関わりの意図、環境による子どもへの影響などについて理解をより深めることができた。



＜合同研修会の実施＞

事後研には、小学校の教職員以外に保育園の園長と5歳児担当の保育者が参加した。また、学校指導課より3名のコーディネーターが加わっての事後研修会となった。小グループに分かれ、子どもの実態に対する保育の意図や、参観を通しての学びを話し合った。気軽に質問し合いながら話を進め、交流の最後にはそれぞれのグループで出た話を共有した。指導助言では保育や架け橋プログラムについての意味づけがなされ、その場にいた教職員が興味深く聴き、理解を深めていた。研修後の感想には「一人一人の主体性や個性を大事にして力をつけるということを小学校でもつないでいくべき」「就学前施設とのつながりをもっと太くしていきたい」などの意見があった。



＜まとめ＞

研修で得られた学びや交流で得られた関係を今後につなげられるようにまとめでは促した。研修会が終わってからも、小学校教員が5歳児担当の保育者と子どもたちについて立ち話をしながら今後の交流や子どもの実態について話をしていた。

成果と課題

保育の実践を通して話し合うことで、子どもの実態についての交流だけでなく、目指す子どもの姿なども共有することができた。今後もこのような研修を定期的に行い、保育とどのようにつなげ、子どもの力を発揮させていくかを議論し、取組を進めていきたい。